

平成 29 年度
東京大学大学院情報学環
教育部シラバス

情報産業論講義VI（人生に役立つプランニング技術）

佐藤 尚之 講師
(株式会社ツナグ)

S1S2ターム 火曜日 4時限 (2単位)

講義概要

コミュニケーション・プランニングの基礎を系統立ってしっかり学ぶことを通して、広告宣伝プランニングのみならず、「人生全般に役に立つプランニング技術」の基礎を身につけてもらおうと思います。

どうやって伝えたい相手に伝えたいことを伝えるか。

これは、メディアや企業の仕事面だけでなく、様々なプレゼンや面接、ひいては恋愛にも使えるたいへん重要な技術です。ただし情報環境は過酷を極め、伝えたいことをもっている人には相当シビアな時代になりました。そういう時代への対処法も含め、基礎から実践まで、課題演習などもしていただきながら、進めていきます。

参考文献

- ・ 「明日の広告」 佐藤尚之 (アスキー新書)
- ・ 「明日のコミュニケーション」 佐藤尚之 (アスキー新書)
- ・ 「明日のプランニング」 佐藤尚之 (講談社現代新書)

講義の構成とスケジュール

- 第1週 オリエンテーション
- 第2週 広告概観/情報環境の把握
- 第3週 トップダウン～ボトムアップ
- 第4週 アイデアの作り方1
- 第5週 グループワーク
- 第6週 グループワーク
- 第7週 マスベースとファンベース
- 第8週 グループワーク
- 第9週 中間とりまとめ
- 第10週 アイデアの作り方2
- 第11週 グループワーク
- 第12週 社会に関与するということ
- 第13週 まとめ

情報技術論講義Ⅳ（ICT サービスデザイン論）

新井田 統 講師
(株式会社KDDI 研究所)

S1S2ターム 火曜日 6時限 (2単位)

講義概要

高度情報化社会の中で、ICT サービスの利用行動は極めて多様化した。そのような中で、従来の新規技術を軸とするサービス開発手法に加えて、顧客体験価値の向上を目指す手法が大きな注目を浴びている。しかし、サービスの提供者と利用者はそれぞれ異なる文化をもつコミュニティに所属しており、両者の間の溝が、利用行動の多様化に伴いサービス開発の課題として顕在化してきている。このため、提供者・利用者の双方の立場に立って考えられる方法論を身につけることが望まれている。

本講義では、新しい通信サービスの開発に向けた実践的な活動を通して、サービス設計の方法論について学ぶと共に、提供者と利用者間に生まれる溝について議論する。

参考文献

『誰のためのデザイン？増補・改訂版—認知科学者のデザイン原論』, D. A. ノーマン, 新曜社
『「行動観察」の基本』, 松波晴人, ダイヤモンド社
『THIS IS SERVICE DESIGN THINKING. Basics - Tools - Cases—領域横断的アプローチによるビジネスモデルの設計』, マーク・スティックドーン, ヤコブ・シュナイダー, ビー・エヌ・エヌ新社

講義の構成とスケジュール

- 第1週 座学：オープニング
- 第2週 座学：ICT サービスデザインの課題，グループ分け（新井田）
- 第3週 座学：サービスデザイン，顧客理解の必要性（新井田）
- 第4週 座学：調査設計，インタビュー設計（久保隅）
(ゴールデンウィーク中にユーザインタビューの宿題有り)
- 第5週 GW：インタビュー分析（久保隅，新井田）
- 第6週 座学：広告・宣伝（ゲスト），GW：インタビュー分析（久保隅，新井田）
- 第7週 GW：ペルソナ作成（久保隅，新井田）
- 第8週 座学：VR（ゲスト），GW：アイデア出し（久保隅，新井田）
- 第9週 座学：サービス開発（ゲスト），GW：アイデア出し（久保隅，新井田）
- 第10週 GW：アイデアの決定とサービスデザイン（久保隅，新井田）
- 第11週 座学：価格設定（ゲスト），GW：サービスデザイン（久保隅，新井田）
- 第12週 GW：プレゼンのブラッシュアップ
- 第13週 最終発表会（GW：グループワーク）

※本授業は、質的調査やデザインプロセス支援に多くの経験を有する GOB-IP の久保隅綾氏にもご協力いただきながら進める。

特別演習Ⅳ（教育部概論）

石田英敬教授、金井崇准教授、池亀彩准教授
中尾彰宏教授、須藤修教授、暦本純一教授、上條俊介准教授

S1S2ターム 水曜日 4時限（2単位）

講義概要

まず、ユニークな特性を持つ教育部というプログラムの歴史を跡づけ、そこで研究生になるということの意義を確認する。

そのうえで、情報学環を構成する多様な研究者が、おおむね2回ずつそれぞれの専門領域について概説する。なお、下記には学際情報学府における各研究者の所属コースが記されているが、講義のなかでコース全体の概説するわけではなく、あくまで各自の専門領域についての講義となる。

情報学環、および教育部の全体像を理解してもらうために2013年度にはじめて開講された授業。1年生はなるべく履修してほしい。

講師毎にA4用紙1枚のコメント・レポートを提出（合計6回）。出席とそれらの内容を総合的に勘案して成績評価する。

参考文献

- ・各講師が適宜、紹介、説明する。

講義の構成とスケジュール

第1週	4/5	上條 俊介	（オリエンテーション）
第2週	4/19	石田 英敬	（文化・人間情報学コース）
第3週	4/26	石田 英敬	（文化・人間情報学コース）
第4週	5/10	金井 崇	（先端表現情報学コース）
第5週	5/17	金井 崇	（先端表現情報学コース）
第6週	5/24	池亀 彩	（アジア情報社会コース）
第7週	5/31	池亀 彩	（アジア情報社会コース）
第8週	6/7	予備日	
第9週	6/14	中尾 彰宏	（総合分析情報学コース）
第10週	6/21	須藤 修	（社会情報学コース）
第11週	6/28	須藤 修	（社会情報学コース）
第12週	7/5	上條 俊介	（まとめ）
第13週	7/12	暦本 純一	（総合分析情報学コース）
第14週	7/19	予備日	

メディア・ジャーナリズム論文献講読V (メディア論の外国語文献の精読と翻訳)

三谷 武司 准教授

S1S2ターム 水曜日 5時限 (2単位)

講義概要

文献の電子化が進む昨今、外国語文献の入手・利用は容易になる一方、一言一句にこだわった精読の機会は実に少なく、学術文献の適切な翻訳技法を学ぶ機会となると皆無に等しい。そこでこの授業では、適切な長さのドイツ語論文を一本取り上げ、毎回 (1) 教員が該当箇所の単語と文法を一言一句完全に解説し、それによって得られた理解に基づき (2) 受講者に適切な翻訳文を作成してもらう。終了時まで論文一本の翻訳を完成させるのが目標である。毎回、履修者の訳文に適宜コメントを付す。

単語・文法の解説はドイツ語未習者の履修を想定して行うので、ドイツ語に触れたことがないという人でも安心して履修してほしい。また「読む」能力と「訳す」能力はまったくと言っていいほど別物である。担当教員は理論社会学研究者であると同時に、ミステリ小説から学術書まで幅広く扱う翻訳家でもあるため、その経験に基づく実践的な翻訳技術の指導も行うつもりである。

参考文献

Niklas Luhmann, 1975 → 2005 (1981), "Veränderungen im System gesellschaftlicher Kommunikation und die Massenmedien," in: *Soziologische Aufklärung* 3, 4. Aufl., VS Verlag, 355-368

タイトル仮邦訳: 「社会コミュニケーションのシステムにおける変化とマスメディア」

講義の構成とスケジュール

初回に、授業の進め方を説明し、対象文献を渡す。単語・文法の解説は、レジュメにしたものを適宜アップデートするほか、授業内で解説する。履修者は毎回の授業終了後に訳文を作成して提出する。提出された訳文は、教員がコメントを付して返却するほか、授業内で適宜コメントする。

メディア・ジャーナリズム論実験実習V (社会をみつめるドキュメンタリーを制作する)

水島 宏明 講師
(上智大学)

S1S2ターム 水曜日 6時限 (4単位)

講義概要

人々の「日常」や「活動」をビデオカメラで撮影し、問題を示しながら、社会のありようや人間の生き方などを問うドキュメンタリーをグループで作ります。テレビ局の制作者や記者らが日々やっている作業と同じです。映像ジャーナリズムの実践を通し、取材力や映像表現力を高めるのが目的です。

テーマを選定し、企画を立て、問題の背景を調査する。具体的な取材相手を探し出し、相手側と交渉する。実際にカメラで撮影し、その映像を編集する。ナレーションを作成して付ける。その作業のすべてを自分たちで実践します。

「授業内」はノウハウを教え、進行状況を確認して助言する場とします。「授業外」で取材先との交渉や撮影、編集は進めてもらいます。実習形式なので欠席が多い人、「授業外」の作業ができない人は単位取得が厳しいと考えてください。撮影や編集の経験は問いません。大事な点は「大学の外」の取材に熱心か、「大学の外」の社会と向き合えるかどうか。完成作品は「地方の時代映像祭」を始め、各コンクールに出品します。過去に受賞作が出ている他、履修者からテレビの世界に進んだ人も複数います。

参考文献

「社会の今を見つめて TV ドキュメンタリーをつくる」(大脇三千代・岩波ジュニア新書)
「ビデオカメラで行こう」(白石草・七つ森書店)

講義の構成とスケジュール

- 第1週 イン트로ダクション「ドキュメンタリーの作り方」
- 第2週 ビデオカメラの使い方の講習
- 第3週 パソコン編集の講習
- 第4週 企画書 まず何を取材するか決める
- 第5週 構成を立てる 展開を想定する
- 第6週 実際に撮影、映像をチェックする (1)
- 第7週 実際に撮影、映像をチェックする (2)
- 第8週 実際に撮影、映像をチェックする (3)
- 第9週 実際に編集、流れをチェックする (1)
- 第10週 実際に編集、流れをチェックする (2)
- 第11週 実際に編集、流れをチェックする (3)
- 第12週 ナレーション原稿、作品完成への最終確認
- 第13週 完成作品の上映と映像ジャーナリズム体験ふりかえり

メディア・ジャーナリズム論講義区（テレビ・ジャーナリズム）

松原 耕二 講 師
(株式会社TBSテレビ)

S1S2ターム 木曜日 4・5時限（隔週）（2単位）

講義概要

テレビの報道番組の現場で、いま何が起きているのか。

報道番組と一口でいっても、そこには多様な要素が含まれる。ニュース、ドキュメンタリーといった番組、レポートや映像インタビューというテレビ記者ならではの仕事、またキャスターという存在。

この講義では、こうしたテレビの現場を俯瞰するとともに、最前線で働く人間が向き合っている課題を考える。毎回、具体的な映像を使って、テレビ・ジャーナリズムの抱える問題と今後の有りようを皆で議論していきたい。

参考文献

- 「職業としてのジャーナリスト」 筑紫哲也 責任編集、岩波書店（2005）
- 「聞く力、話す力～インタビュー術入門」 松原耕二著、河出書房新社（2015）
- 「記者の報い」 松原耕二著、文芸春秋（2016）

講義の構成とスケジュール

第1週（1コマ）	「イントロダクション」
第2週（2コマ）	「テレビキャスターの役割とは何か」
第3週（2コマ）	「フェイク&ネット&オールド・メディア」
第4週（2コマ）	「本土メディアはなぜ沖縄を伝えないのか」
第5週（2コマ）	「特ダネはどう生まれるか～調査報道とは」
第6週（2コマ）	「人に話を訊くには～インタビュー術入門」
第7週（2コマ）	「報道の自由はどこまで許されるのか & 総括」

情報技術論研究指導Ⅱ

苗村 健 教授

S1S2ターム 金曜日 4・5時限 (4単位)

講義概要

7月に開催する東京大学制作展 EXTRA の企画・運営を通じて、大学院生の研究や表現活動を体験する。さまざまな表現手法を学ぶとともに、それぞれが作品制作を行なう。また、受講者は企画や展示運営上の役割を担い、ディスカッションを通して展示全般のプロセスを学ぶ。原則として、欠席は認めない。

参考文献

講義の構成とスケジュール

情報社会論講義Ⅱ（メディアとデータリテラシー）

萩原 雅之 講師

（トランスコスモス・アナリティクス）

S1S2ターム 金曜日 5時限 （2単位）

講義概要

メディアがとりあげる公的統計、アンケート調査、世論調査などの報道において、無意識にあるいは意図的に誤った分析や解釈が行われ、受け手の誤解を生むものが少なくない。そのような状況を生み出す背景を具体的な事例を通して理解するとともに、データを正しく読み解くための理論、スキルとリテラシーについて学ぶ。また近年注目を集める「データジャーナリズム」の意義や可能性についても考察する。特定のテキストは用いず、レジュメや資料に基づいて議論を行う。

参考文献

西内啓『統計学が最強の学問である』ダイヤモンド社、2013年

ネイト・シルバー『シグナル&ノイズ』日経BP社、2013年

ダニエル・カーネマン『ファスト&スロー（上・下）』早川書房、2012年

“Data Journalism Handbook” 日本語版 <http://datajournalismjp.github.io/handbook/>

講義の構成とスケジュール

- 第1週 イン트로ダクション：ジャーナリズムとリテラシー
- 第2週 事例批評（1）：世論調査、選挙調査、社会調査
- 第3週 事例批評（2）：企業リリース、消費者調査
- 第4週 事例批評（3）：公的統計、オープンデータ
- 第5週 データ収集法（1）：サンプリング、フィールドワーク
- 第6週 データ収集法（2）：アンケート技術、ヒューマンバイアス
- 第7週 データ分析法（1）：基本統計、クロス集計、多変量解析
- 第8週 データ分析法（2）：ビッグデータ、相関と因果、要約と予測
- 第9週 伝え方の技術（1）：ビジュアルライゼーション
- 第10週 伝え方の技術（2）：ストーリーテリング
- 第11週 演習（1）：データジャーナリズム実践
- 第12週 演習（2）：データジャーナリズム実践
- 第13週 発表および質疑応答

メディア・ジャーナリズム論講義Ⅰ (報道現場の課題と争点)

河原 仁志 講師
(共同通信)

S1S2ターム 金曜日 6時限 (2単位)

講義概要

報道の現場が今日、直面している課題を具体的に議論してジャーナリズムの未来を考えます。議論の素材は私自身が編集局長時代にぶつかった「権力との関係性」「実名報道」「『公正中立』の持つ意味」などを予定していますが、学生の皆さんからの問題提起も歓迎します。また、日本のメディア史でエポックとなった事件を検証し、ジャーナリズムがどう変わり、いま何が求められているかを検討していきます。並行して、時機にかなったテーマを掲げて討論し、ジャーナリスティックな思考を養いたいと考えています。

後半は、あまり知られていない通信社の仕事を紹介しながら、新聞、雑誌、放送、ウェブなどの媒体別の特性や課題、将来性を検討していきます。

参考文献

- 「大衆の反逆」(オルテガ・イ・ガセット)
- 「三酔人経綸問答」(中江兆民)
- 「ロゴスの市」(乙川優三郎)

講義の構成とスケジュール

- 第1週 オリエンテーション
- 第2週 報道現場の争点(1)「読者本位の功罪」
- 第3週 報道現場の争点(2)「権力との関係」
- 第4週 報道現場の争点(3)「専門性のワナ」
- 第5週 報道現場の争点(4)「メディアとコンプライアンス」
- 第6週 戦後メディア事件史から学ぶ(1)
- 第7週 戦後メディア事件史から学ぶ(2)
- 第8週 戦後メディア事件史から学ぶ(3)
- 第9週 戦後メディア事件史から学ぶ(4)
- 第10週 エクスカーション ～共同通信の編集現場
- 第11週 通信社とは
- 第12週 地方紙の力
- 第13週 最終討論

情報社会論研究指導Ⅴ（政党とコミュニケーション）

前田 幸男 教授

A1A2ターム 火曜日 5時限（4単位）

講義概要

政党の選挙キャンペーンに関して近年出版された一般書籍・論文を輪読します。政党あるいは候補者が選挙時あるいは非選挙時にどのような活動を行い、有権者にメッセージを届けたのかを検討します。特に、政党と有権者のコミュニケーションの歴史的变化と、マスメディアが果たす役割に着目する予定です。

事前に報告者を決めた上で、報告・討論を行う演習の形式で授業を行います。担当が割り当てられた週については、それなりの時間が準備に必要となりますからご注意ください。可能であれば、新書の著者や新聞記者を招いてのセミナーを織り交ぜたいと考えています。

参考文献

- 石川真澄・山口二郎『戦後政治史 第三版』岩波新書 2010
北岡伸一『自民党－政権党の38年』中公文庫 2008年（1995年）
中北浩爾『自民党政治の変容』NHKブックス 2014年

講義の構成とスケジュール

- 第1週 導入・説明
第2週 逢坂巖『日本政治とメディア』中公新書 2014
第3週 小口日出彦『情報参謀』講談社現代新書 2016
第4週 西田亮介『メディアと自民党』角川新書 2015
第5週 セミナー（著者－交渉予定）
第6週 ジェラルド・カーティス『代議士の誕生』日経 BP2009（1971）
第7週 朴喆熙『代議士のつくられ方』文春新書 2000
第8週 林芳正・津村啓介『国会議員の仕事』中公新書 2011
第9週 季武嘉也『選挙違反の歴史』吉川弘文館 2007
第10週 セミナー（インターネット業界関係者－交渉予定）
第11週 薬師寺克行『公明党』中公新書 2016
第12週 北岡伸一『自民党－政権党の38年』中公文庫 2008
第13週 吉田徹『「野党」論：何のためにあるのか』ちくま新書 2016

上記は書籍の選定を含めてあくまで素案であるので変更の可能性が高い。

情報産業論実験実習Ⅲ

(メディアとしてのペーパーバック——日本独自の出版文化「文庫・新書」の解剖学)

倉田 卓史 講師

(講談社)

所澤 淳 講師

(講談社)

A1A2ターム 火曜日 6時限 (4単位)

講義概要

ハードカバー (単行本) とは異なる役割をもつ書籍としての文庫・新書 (選書) は、日本独自の発展を遂げてきたペーパーバック群です。どうつくられ、どう読まれているのか。出版が担う「知のパノラマ」における位置づけと機能を、ゲストスピーカーとの対話や模擬企画づくり、読書会など、双方向のやりとりを通じて、受講生 - 講師がともに考えを深められる形式で講義を進めていきます。可能なかぎり編集現場での話題を増やし、出版社の日々の活動の一端を感じとっていただける構成を目指します。

参考文献

必要に応じて、適宜、紹介・説明します。

読書会の対象書目は、受講生の希望や志向を採り入れながら決定したいと考えています。

講義の構成とスケジュール

- 第1週 ペーパーバックを解剖する (なぜ生まれたか。どう普及してきたか)
- 第2週 造本と体裁を分析する——ピースとは異なるその構造
- 第3週 模擬企画を考えてみる (前篇) & 第1回読書会
- 第4週 著者と編集者、それぞれの役割を分解する (前篇)
- 第5週 著者と編集者、それぞれの役割を分解する (後篇)
- 第6週 原稿を磨く——文章の加減乗除とは (前篇)
- 第7週 原稿を磨く——文章の加減乗除とは (後篇) & 第2回読書会
- 第8週 存在を主張する——タイトルとコピーの役割と機能 (前篇)
- 第9週 存在を主張する——タイトルとコピーの役割と機能 (後篇)
- 第10週 シリーズと棚——誰に、どこで、どう選ばれるか
- 第11週 「編む」だけでは本はできない——校閲とデジタルプロモーション
- 第12週 模擬企画を考えてみる (後篇) & 第3回読書会
- 第13週 ペーパーバックのこれから

情報社会論文献講読Ⅱ（マス・コミュニケーションの社会学）

河 兪珍（ハ キョンジン） 助 教

A1A2ターム 水曜日 5時限（2単位）

講義概要

ウォルター・リップマンの『世論』は、出版されてから約1世紀が経とうしている現在も政治学や心理学、ジャーナリズム研究において読まれ続ける古典である。「ステレオタイプ」(stereotype)をはじめ、本のタイトルでもある「世論」(public opinion)の形成に関するリップマンの議論は、情報社会の仕組みを理解する上で重要な考察を提供してくれる。授業では、『世論(上・下)』(岩波書店)と『幻の公衆』(柏書房)を精読し、「世論」はいかにして形成されるか、その際、「公衆」(public)という概念をどのように理解するかについて受講生と議論しながら考察していくことにしたい。

参考文献

- ・Lippmann, W., 1922, Public Opinion (=1987、掛川トミ子訳『世論(上・下)』岩波書店。)
- ・Lippmann, W., 1925, The Phantom Public (=2007、河崎吉紀訳『幻の公衆』柏書房。)

講義の構成とスケジュール

- 第1週 イン트로ダクション
- 第2週 『世論』第1章～第3章
- 第3週 『世論』第4章～第6章
- 第4週 『世論』第7章～第9章
- 第5週 『世論』第10章～第12章
- 第6週 『世論』第13章～第15章
- 第7週 『世論』第16章～第18章
- 第8週 『世論』第19章～第21章
- 第9週 『世論』第22章～第24章
- 第10週 『世論』第25章～第28章
- 第11週 『幻の公衆』第1部
- 第12週 『幻の公衆』第2部
- 第13週 『幻の公衆』第3部

メディア・ジャーナリズム論講義Ⅱ (体験的メディア・ジャーナリズム論)

福永 宏 講 師

(元・読売新聞社/元・東洋経済新報社・情報学環同窓会副会長) 他

A1ターム 木曜日 5・6時限 (2単位)

講義概要

東京大学新聞研究所・社会情報研究所・情報学環教育部のOB/OGによる講義を本年度も企画・実施する。

現在、新聞、放送、雑誌などのいわゆる「既成メディア」は、知識人、種々の政治勢力、統治権力、一般国民大衆など、さまざまな方面から批判を受けている。これはわが国のみならず、米国大統領選挙の過程でもみられたように世界的な現象といえる。さらに、経済的にもネットメディアに追い上げられ、部数、広告、視聴率の面でかつてない厳しい状況に直面している。またこうした厳しさは、今後、さらに強まると考えられる。

そこで本講義では、ネットメディアを含むジャーナリズムやメディアの現場で活動しているOB/OGが自らの直接的な体験を踏まえ、現在の言論状況やジャーナリズムが置かれている実情を紹介・解説し、受講者と討論する。

将来、この分野へ進もうと考えている者はもちろん、それ以外の分野を志向する者にとっても、「現在」を理解するために有益な体験となるであろう。

参考文献

■『石橋湛山評論集』石橋湛山 岩波文庫

それ以外は各講師が必要に応じて適宜紹介する。

講義の構成とスケジュール

(各回の内容・講師陣は8月をメドに発表する)

※講義時間は17:00～20:00とする。

※各回リアクションペーパーを配布、原則として中間の休憩時間に質問・意見を記入してもらった上で回収し、後半の講義ではそれを踏まえて意見交換を行う。

※これまでの履修者も再度履修可とする。

※評価は、出席点と期末に課すレポートで行う。

